

氏名	マツ イ ア キ 松 井 亜 希
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第182号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉プーランク作曲 モンパルナス 他 〈論文〉演奏における有機的統一 —プーランクの歌曲集《冷気と火》に 基づく—考察—

論文等審査委員

(総合主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	寺谷 千枝子
(副査)	〃	〃	(〃)	伊原 直子
(〃)	〃	〃	(〃)	多田羅 迪夫
(〃)	〃	名誉教授		朝倉 蒼生
(〃)	〃	〃		三林 輝夫

(論文内容の要旨)

声楽作品が持つ魅力の一つは、歌の旋律と言葉の結び付きと交わり、両者が一体となった融合にある。問題は、これらがどのようにして成し遂げられるのか、どのようにして聴き手に伝えられるのかという点である。本論文においてプーランクの歌曲集《冷気と火》で試みたことは、そのひとつのアプローチの仕方である。

本研究の発端は、テンポの緩急やキャラクターの変化が激しいプーランクのチクルスをひとつのまとまりのある音楽として演奏するため、部分的な表現ではなく、曲集全体にある流れを理解し、演奏によって作品を有機的に統一したいという想いであった。

作品に存在する流れは、テキストに存在する流れと密接な関わりを持つ。その関わりを明らかにするために詩の内容的展開を紐解くのだが、プーランクの歌曲作品で扱われているテキストは、シュルレアリスムに代表されるように、具体的な事象を指さずに間接的な表現で詩的世界を構築するため、言葉の意味だけでは理解できないことが多い。そのため、まずは詩を根本的に構成している詩人の人間性や思想を理解し、テキストの意味や詩的展開を把握する。それから詩の展開と音楽のそれとを一致させ、実際の演奏に生かしてゆく。

その実践のために、本論文ではエリュアールの詩によるプーランクの歌曲集《冷気と火》に基づき、第一章でプーランクにとってのエリュアールとエリュアール作品の位置付けを行ない、エリュアールの活動内容と人物像から、《冷気と火》の詩に現れるエリュアールの思想的特徴や詩人の主張を明らかにする。

そして第二章では実際に《冷気と火》のテキスト面での分析と考察を行ない、エリュアールの間接的でイメージ的な詩を現実的メッセージとして読み解く。そして曲を分析する上での手がかりとなる詩の内容的・時間的展開を明らかにする。

第三章では、歌曲集《冷気と火》の楽曲分析を行ない、言葉と音楽の関係、歌とピアノパートの関係、詩の流れと音楽の流れの符合から、各部分が全体とどのように協働しているかを明らかにする。

そして第四章では、第三章までの研究で得たものが実際の演奏にどう生かせるかを演奏論としてまとめる。具体的には、全体を詩と音楽の両面から把握することで、

① 各曲の位置関係と相互作用が明らかとなる点

- ② 曲間に存在する詩的・音楽的展開を表現できる点
- ③ 譜面上の指示に明確な意味を見出せる点
- ④ 演奏における身体的工夫を行なえる点

以上の四点である。また、これらがプーランクの他の歌曲作品へ応用が可能である点や、効果的でまとまりのあるプログラミングを考える際の手がかりになる点を述べる。

上記の研究を行なった上で演奏することで、演奏家は「演奏する瞬間」により適切なインスピレーション（第六感と言える心的感覚器官の働き）を受けて詩と音楽を融合し、作品に表現を与えることができるということを経験した。これを結論付ける。

(総合審査結果の要旨)

「演奏に於ける有機的統一」と題された本論文は、副題を“プーランクの歌曲集「冷気と火」に基づく一考察”とし、第一章でプーランクとエリュアールについて触れ、さらに詩人エリュアールの戦争と思想の変遷、女性からの作詩へのインスピレーションについて述べるが、二章、三章、四章のほとんどを歌曲集「冷気と火」の詩の分析と楽曲分析と演奏論に費やした、演奏家が演奏家のために書いた（この場合は申請者自らの為であろう）論文といえよう。

比較的資料と情報の少ない作曲家であるが、プーランクに共感を覚え、実際に多くのプーランクの作品の演奏を試みてきた申請者の実践から体得したとも言える、演奏家の視点のわかりやすい演奏論である。

「演奏に於ける有機的統一」を求める申請者は、歌曲集「冷気と火」がひとつの詩であるにもかかわらず、音楽的に異なる色や表現を求められる中で大きな一つの流れを感じ、ひとつひとつの歌曲が孤立することなく連なって演奏されるべきと考える。

演奏会でのプログラムも数々の色彩の異なる歌曲が集まって、大きな流れを構成し有機的な統一ができるように試みるという考えのもと、論文のテーマが演奏審査会に実践された。

演奏審査会は「プーランク歌曲作品の世界」と題して平成22年2月18日に第6ホールで行われた。

「冷気と火」やヴィルモランの詩による「おかしな婚約」を中心にさまざまな詩人、言語（ポーランド語、英語）に及ぶ30曲余りの作品を並べ有機的な繋がりを試み、表情豊かなまとまりのあるプログラム構成として成功した。

声の響きと色彩、テキストの明瞭さが今後の課題としてより期待されるが、知的な解釈と感性豊かな演奏表現力と技術的な安定感でプーランクの小品たちを、申請者の言うところの「演奏は最終的にインスピレーションである」で歌いきったといえる。

以上によって学位取得にふさわしいとし、「合格」に決定した。